

発行：令和3年4月1日
 (株)三協技術 企画管理部
 仙台市青葉区国分町 3-8-14
 TEL：022-224-5503



- ・歴史は災禍と復興のくり返し
- ・歴史が生んだ「みちのく黄金伝説」
- ・黄金山産金遺跡と天平ろまん館
- 【コラム】二つの「黄金山神社」
- ・金華山講について2
- ・謎の「天平」宝珠瓦

～大地の声を読む～



歴史は災禍と復興のくり返し

株式会社 三協技術 文化財調査室長

結城 慎一

2月13日 午後11時8分頃、宮城県南部、福島県中通りと浜通りで震度6強の地震があり、東日本大震災の余震と発表されました。津波発生はありませんでしたが、10年前を思い出させる強烈な揺れで、各地で被害が発生しました。

東日本大震災から10年が経った今日は、日本国内に留まらず世界中の人々が新型コロナウイルスの災禍で苦しんでいます。東京オリンピックが、また天皇・皇后両陛下ご臨席で、石巻市で開催予定であった昨年秋の「全国豊かな海づくり大会」が今年に延期になったように、多くの行事等が延期または中止になったことは周知のことと思います。

コロナ禍ですが、今年6月で世界遺産「平泉の文化遺産」が登録10年と節目の年を迎え、また涌谷町・気仙沼市・南三陸町（以上宮城県）・陸前高田市・平泉町（以上岩手県）の5市町申請の「みちのく GOLD 浪漫」が日本遺産に認定されて3年目を迎えます。また世界遺産登録への動きもあります。新聞情報ですが、北海道、青森、岩手、秋田各県にまたがる「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、今年6、7月に開催予定の世界遺産委員会で、文化遺産登録審査の予定になったようです。それぞれの次のステップを期待するとともに、それらが地域の文化の発信及び産業振興に役立ち、少しでも明るい話題を提供できることを祈念しております。

この広報誌『温故知新』第5号は、第3号に続く第2弾として、みちのく黄金伝説の歴史や天平産金遺跡関連、金華山講関係のレポートで構成されております。黄金山産金遺跡の紹介にあたりましては涌谷町教育委員会に多大なるご協力をいただき、また金華山講のレポートにあたっては、金華山黄金山神社及び七十七銀行、加藤八郎氏から色々ご教示いただき有難うございました。この場を借りましてお礼申し上げます。

歴史が生んだ「みちのく黄金伝説」

株式会社 三協技術 文化財技術顧問

渡邊 泰伸



古代からみちのくと呼ばれた東北地方には黄金に関わる事象や伝承が数多く残り、東北地方や日本国内に止まらず世界的にも知られていた。みちのく黄金伝説を作り上げたのは次の三つの代表的ものであろう。「東大寺大仏造立」「平泉金色堂と仏教文化」「モンスターゴールドの発見」である。これらの古代、中世、近代の出来事が、各時代を生きた人々の心の底深くに残り、歴史ロマンとして形成されたのであろう。

みちのく黄金伝説の嚆矢は「東大寺大仏造立」を高らかに歌い上げた聖武天皇の時代の万葉歌人・大伴家持である。

すめろきの ^{みよ}御代さかえむと ^{あずま}東なる ^{くがね}金花咲く
みちのく山に

この歌は749(天平21)年正月4日、陸奥国小田郡(宮城県涌谷町辺り)より黄金が出た事を言祝(ことほぐ)歌である。

「東大寺大仏造立」、つまり東大寺の盧舎那仏造像に関わる事の始まりは、737(天平9)年頃から九州からじわじわと広まっ

た天然痘と考えられる感染症のパンデミックである。この時代は天平時代とも呼ばれ、東アジアの政治的安定により遣唐使、遣新羅使等の交流が活発となり、738(天平9)年に帰国した遣新羅使にあっては大使が病死、副使が病気のため入京できなかった。これ以後、都では疫病が流行しクラスターが発生した。

聖武天皇の治世の天平年間には疫病や飢饉、災害が多発して兵乱まで勃発し、社会不安が募るばかりであったため、聖武天皇は各地に遷都して災いから脱しようとした。同時に聖武天皇は741(天平13)年全国に国分寺・国分尼寺を造り、また奈良に大仏を造り仏力で国を治めようとした。

747(天平19)年9月29日、東大寺で大仏の鑄造を開始したが、問題は仏像の鍍金・金箔に使用する金が国内で産出するか否かであった。鍍金に要する金不足で造立が進まず、全国に金探索の指令が出される一方で、大陸からの調達も検討されていた。

そのような折、749(天平21)年2月21日、みちのくの国よりはじめて黄金が献上されたとの報告が届いた。貢金された金は砂金900両(1両14gとして)約12.6kg、750mlのペットボトルほぼ一本分に当たる。大仏の頭部の鍍金に相当する分量と考えられる。ちなみに大仏の鍍金量は1万436両程とされている。4月1日、聖武天皇は東大寺大仏殿に行幸し、我が国最初の産金として仏前に詔を捧げ、大赦等を行うとともに、4月14日「天平感寶」と改元した。

749(天平感寶元)年8月12日、越中国司で万葉歌人大友家持は、陸奥国で黄金が産出した旨の詔書を賀す歌を詠み、天皇の大願の事業成功を讃えた。同年5月11日、産金地の国司百済王敬福には従三位が、産金に貢献した陸奥の官人らもすべて位階が進められた。この影響は絶大で、750(天平勝寶2)年には駿河国からの産金もあり、各地からも貢金があったと推測される。

752(天平勝寶4)年2月18日、陸奥国多賀郡以北の各郡の調庸は金で納めることとし、正丁四人を一両に換算し、貢金額は350両に達した。

743年の産金から756年の開眼供養までの7年間は目まぐるしいほどの進展があり、行幸、大赦、改元、言祝ぎ、位階の授与、税の金納等多様な施策を行って、大仏造立を推し進め開眼供養にこぎ着けた。757(天平寶字元)年、盧舎那大仏すべての鍍金が完了したと推定される。大仏は高さ14.98m、重さ250tで鍍金、金箔で覆われていた。前例のない光り輝く東大寺盧舎那大仏は、陸奥国のみならず日本中の人々に、広く大陸まで知られる存在となった。東大寺大仏造立については『続日本記』の空白を埋めるように、『扶桑略紀』や『東大寺要録』の資料があるが、『続日本記』とは矛盾する部分もある。

ところで陸奥国の小田郡が日本最初の産金であるとする点については、「天平産金遺跡」の調査者である故伊東信雄氏は、文献的にも考古的にもわが国最初の金の産出ではないとしている(伊東1960)。5～7世紀には古墳等の遺跡から多くの金製品が出土し、「日本書紀」の681(天武10)年には金を陸奥で精錬しているとある。戦前の産金記事評価では、陸奥守百済王敬福の陸奥国小田郡産出した黄金900両の献金は、その祖禪広が百済から663(天智2)年に亡命以来その家に伝えられてきた金を、機を見て献上したと考えられていた。産金記事の現在のような肯定的な評価は「産金遺跡」の調査後である

古代末から中世には「平泉金色堂」に関わる事項がある。中尊寺は山号を「関山」という。「衣川の関」にあたる山に由来する。中尊寺は堀河天皇の勅命の伽藍で、藤原清衡(1056～1128)が1105(長治2)年造営に着手し、21年の歳月を掛けて完成させた。前九年・後三年の役の戦没者やあまたの霊を浄土へ導き、奥州全体を仏国土にしたいとの願いから建立したとされる。

金色堂は1124(天治元)年に清衡が建立した。阿弥陀如来を



①延喜式内 黄金山神社：拝殿は町指定文化財に指定されている。神社周辺では発掘調査が行われ、瓦片が出土している。②拝殿下の礎石：現在の社殿を支える礎石の中にひと際大きい礎石が見られ、周辺から採取されている古瓦から瓦葺きの建物の存在が想定される。③黄金沢：神社の下を流れる小川。今でも砂金が採取されることもあるという。



本尊とする阿弥陀堂で、床面積26㎡、16畳ほどの小規模なお堂である。床をはじめ主要部に金を張り詰めている比類のない建物であり、平泉三代の霊廟でもある。その建物には9kgの金を使用したと推定され、1962(昭和37)年の解体修理で3万枚の金箔を通常の3～5倍の厚さにし、約10kgの金箔を付け足した。

中尊寺にはもう一つ大変貴重なものがある。それは中尊寺に納められた宋版『一切経』である。7千余帖を初代の清衡が買い集めたとされ、その為に10万5千両を支払ったと伝えられている。現在は宋版『一切経』は中尊寺経として226帖残っている。その製作年代から3代基衡が『紺紙金銀一切経』写本の手本として当時最も信頼できる底本として収集した可能性が高い。宋からの輸入品で約3t、今日の金価(2020/12/22)1gは5,069円(K18)で、換算すると152億円相当となる。

平安後期の藤原氏は産金による経済力を背景に、平安京に次ぐ仏教文化を成立させ、都にもその存在が知られるようになった。また、その膨大な金は北宋・沿海州などの交易に使用され、「金色堂」の噂と共に陸奥は金を産出する地として広範囲に知られるようになった。

海外の視点にも同様な黄金伝説がある。日本の鎌倉時代、元のカビライ・ハンクビライに使えたマルコ・ポーロが欧州へ日本を紹介した『東方見聞録(イル・ミリオネ(II Milione))』・『世界の記述(Devisement du monde)』で、「中国大陸から1,500海里(約2,500km)にある大きな島(日本)には黄金の宮殿や豊富な宝石・赤い真珠類が有る」と記している。黄金の国伝説は、中尊寺金色堂の噂、遣唐使時代の留学生の資金、また日宋貿易にも金が使われたことが、日本は金の国という認識を中国側に与えたと考えられる。

当時の日中貿易は泉州が拠点で、中国南部の「日本国」の発音「ji-pen-quo」であり、それが黄金の国「ジパング」の由来となったと考えられている。

イスラム社会にも黄金国を指す「ワクワク伝説」があり、これも倭国「Wa-quo」につながるものと考えられる。

1611(慶長16)年来日したイスパニヤ大使ビスカイノの目的が東方海上にあるとされていた金銀島の探索であると考えられ、みちのく黄金国伝説が広く流布していたと感じさせる。

現在知られている東北地方金山の分布は、奥羽山脈と北上山地に大別される。(山形県との境、福島県の一部にも存在するがここでは割愛)

奥羽山脈の金鉱床は新第3系の中熱水性金銅網状鉱床～黒鉱鉱床が主体で、上部は金鉱で下部は銅鉱床に変わる傾向があり、和賀川流域上流に多い。金鉱山の分布は薄く大金山は少ない。秋田県大館市所在の大葛（おおくぞ）鉱山、岩手県北上市に所在する鷲之巢（わしのす）金山が代表的である。

北上山地の金鉱は古生代と中生代の岩類熱水性含金石英脈が多く、高温交代性の六黒見鉱床、ペグマタイト性の矢越鉱床があり、北上川の東・北上高地の南部に分布している。三陸海岸に面した大船渡市～陸前高田市～気仙沼市内陸部～一関市～平泉町の面として捉えられる。1950(昭和25)年の「岩手県鉱山誌」では178カ所の金山が存在したとされている。岩手県陸前高田市所在の玉山（たまやま）金山と宮城県気仙沼市所在の大谷（おおや）金山、鹿折（ししおり）金山が主要である。

産金の方法は、川砂金の採集から丘陵上の露天掘り（土金）、坑道による採集（岩金）と変化したと考えられる。坑道法は近世以降に主流となったものである。古代・中世の金鉱に関する記録は不十分で、近世鉱山と重複し明確でない。

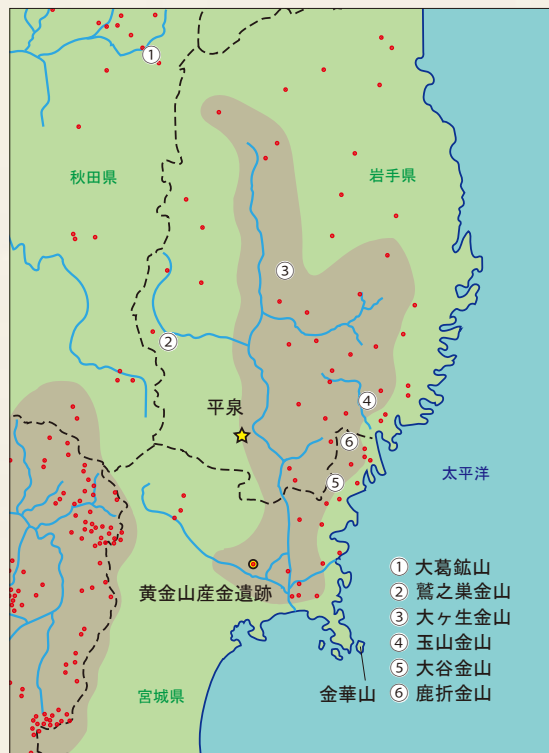
みちのくと呼ばれた地域には膨大な数の金山が実在した。現在はその全てが資源の枯渇や第二次世界大戦中の1942(昭和17)年の金山整理統制、戦後は採算性の不足、ヒ素等の環境汚染からそのほとんどが閉山している。

金山に関わる記録・伝承はみちのくに沢山残っている。古代は「東大寺盧舎那仏大仏」の鍍金産出地として、古代末から中世には金に彩られた平泉「金色堂」等の繁栄の資となったことで知られている。

近世・近代にも多数の金山があり、1904(明治37)年勃発した国家の興亡をかけた日露戦争の時、鹿折金山から産出した「ナゲットモンスター」とか「モンスターゴールド」と呼ばれた大金塊が債権調達に役だったという。時の総理大臣桂太郎が「この大金塊があれば戦費の心配はないと前線の兵に伝えよ」と言ったという逸話がある。現代にも続く新たな黄金伝説である。みちのくはまさに、黄金伝説に充ち満ちていた。

主な引用・参考文献

- 青木和夫・稲岡耕二 1992・94『続日本書紀』二・三 新日本文学大系 岩波書店
有賀祥隆・泉武夫他 2008『特別展 平泉 みちのく浄土』NHK 仙台放送局 NHK 仙台
プラネット東北
池 享・遠藤ゆり子編 2012『産金村落と奥州の地域社会 ―近世前期の仙台藩を中心に―』
伊東信雄 1960『天平産金遺跡』涌谷町教育委員会
宇治谷 孟 1998・99『全現代語訳 日本書紀』上・下 講談社学術文庫
宇治谷 孟 1997・98・95『全現代語訳 続日本書紀』上・中・下 講談社学術文庫
梶原正昭 山下宏明 1999『平家物語 上』新日本文学大系 岩波書店
菅野 成寛 2007『アジア遊学 勉誠出版
気仙沼史談会他 1994『郷土史ミニ・シンポジウム 気仙沼・本吉の産金の歴史』(資料)
芸術新潮 1986年『追跡! 奥州平泉黄金の百年』新潮社
高橋興衛門 2014『岩手の金山と産金遺跡』
長澤和俊 1989『マルコ・ポーロの大航海: 海のシルクロード史』中公新書
森嘉兵衛 1936『陸奥産金の沿革(二)』『社会経済史学』6
渡邊泰伸他 2007『大谷金山跡』『宮城県の歴史散歩』山川出版社



金山分布図

①大葛鉱山: 秋田県大館市所在。708(和銅元)年発見とされ東大寺大仏、金閣寺造営にも関わるといわれるが、支配人の荒谷家の記録では、1521(大永元)年頃に発見されたとされている。荒谷家がこの役目についた年が、鉱脈発見の時を示している可能性がある。戦国期にも採掘され、江戸期は佐竹家と南部藩との境界争いの元にもなる。ピーク時は年間44kgの金を産出していた。1975年に閉山した。1998年に大葛温泉の「大葛金山ふるさと館」に資料が公開されている。

②鷲之巢金山: 岩手県北上市(旧西田町)所在。伝承では平泉に関わるとされるが不明である。江戸期には洞山とされている。丘陵部に露天掘り残り、中世末の採掘の可能性がある。周囲には竊穴等七つの鉱床がある。1964年に閉山した。

③大ヶ生金山: 岩手県盛岡市所在。鎌倉初期に発見され、源頼朝の奥州攻め後に領主となった河村秀清(1177年生まれ?)の子孫が採掘していたという。明治期に金鉱脈が再発見されピーク時は年間80kg程の金が出た。戦時中に閉山されて坑道が没した。この金山周辺には小規模金山が散見される。

④玉山金山: 岩手県陸前高田市所在。日本で初めて金が見つかった金山とされ、天平年間(729～749年)は砂金が採掘され、東大寺大仏、中尊寺金色堂にも供給されたとされている。藤原朝は朝廷や宋に多量の金を献上しているが、それは玉山金山産出とされている。戦国期に一度秀吉の直轄となり、後、伊達家の管轄となり慶長遣欧使節の費用の資となったという。「伊達」あるいは「気仙郡の四金山」として今出川金山、雪沢金山、青金山の名が残る。この鉱山群の特徴は全山が一貫大鉱床となっていることである。古生代に属する花崗岩や閃長岩・輝緑岩等が構成され、鉱材付近は片麻岩状をなし、白石英岩が玉山の由来である。手掘りの狭い坑道が網目状の迷路になり、迷い込んだら出られないと噂されていた。延宝3年(1675年)頃から産出量が落ち、落盤事故もあり閉山された。

⑤大谷金山: 宮城県気仙沼市所在。前九年の役の前から金が産出し、平泉との関わりがあると考えられている。戦時中には年間1tもの金を産出した。戦後再び採掘し、産金量は年間400～450kgとなり1976年には閉山した。歴史資料館が建てられている。

⑥鹿折金山: 気仙沼市所在。平泉との関わりが伝えられるが確かかなことは不明である。1904(明治37)年に発見された大金塊が著名である。重さ約2.25kgで金含有率は約83%で自然金としては最大級である。怪物金「ナゲットモンスター」あるいは「モンスターゴールド」と名付けられ、同年米国の「セントルイス万国博覧会」に出品し、青銅メダルと大賞状を受賞した。高橋唐青が日露戦争の債権調達に役担わせたという。現代にも続く黄金伝説がある。

黄金山産金遺跡 と 天平ろまん館

文化財調査室

小野寺 純也



「天平」丸瓦片（個人蔵）※宮城県指定文化財

黄金山産金遺跡は、宮城県遠田郡涌谷町に位置する黄金山神社とその境内、周辺に広がる遺跡の総称である。遺跡の中心に鎮座している黄金山神社の歴史は古く、8世紀初頭にまでさかのぼることができる。

天平年間以降に延喜式神名帳へ記載されるなど、黄金山神社は産金地として高い格式を持つ官社となっていた。

前稿「みちのく黄金伝説」でもふれたように、平安時代には、陸奥国において新たな産金地の発見が相次ぎ、ゴールドラッシュの賑わいを見せ始める。これにより、宮城県北から岩手県南部が主だった産金地へと移行するが、その後、小田郡の産金量が減少するなど、様々な要因により黄金山神社の政治的な重要性が希薄になっていった。以降、11世紀の『水左記』、『師記』の記録を境に、歴史の表舞台からしばらく姿を消すこととなる。

江戸時代は、1810(文化7)年、伊勢国白子の国学者である沖安海^{おきやすみ}がこの地を訪れ、当時の黄金山神社に立ち寄った。すでに神社は荒廃し、礎石のみが残されているという有様であり、その後1813(文化10)年『陸奥国小田郡黄金山神社考』を記した。当時は、仙台の儒学者である佐久間義和(洞巖)によって、万葉集に歌われた『美知能久夜麻^{みちのくやま}』は牡鹿郡金華山と比定され、様々な学者たちの中で定説となっていた。これに対し、沖は文献に基づいて産金地の立地を理路整然と考証することで、天平の黄金伝承に残る神社を、遠田郡涌谷町黄金迫に鎮座するこの遺構であると示した。そして自らの寄進によって、黄金山神社を再建し、その正当性を発信することとなった。以来、多くの論考の中で精査され、涌谷町が天平の産金地であると見直されていく。

これらを補うかのように、1889(明治22)年には神社周辺に

において、『天平』の文字がへう描きされた瓦片が表採された。また、1944(昭和19)年には、拝殿の下を流れる宮前川(通称：黄金沢)から、『天□(「平」と考えられる)』の文字がへう描きされた宝珠瓦片が確認され、六角円堂の存在が想定されるなど、仏教色の強い発見が相次いだ。これらの発見により、当地を再検証する機運が高まり、1957(昭和32)年には東北大学の教授であった伊東信雄氏によって、神社境内の本格的な発掘調査が行われた。

調査によれば、現在の拝殿の裏手に、南北約10m、東西6.5mにわたる基壇跡と、根石4基が確認された。根石の上に置かれたであろう礎石は、調査当初確認できなかった。しかし、現在の拝殿には、その規格に似つかわしくない大きさの礎石が使用されており、当時の礎石を転用したものであると想定された。根石は約3.3m間隔で配置されており、地形を考慮すると、この地に建造された建物は長さ最大20mであったことが窺える。もし六角円堂であった場合、直径約9.9mの規模となるが、いずれの建築物であっても狭小な土地であるため、この建物は瓦葺きの小堂と考えるのが適切であると結論づけられている。拝殿の東側に広がる崖の裾からは、多賀城Ⅱ期もしくは陸奥国分寺創建期に比定される六葉重弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦がまとまって出土している。この発見から、残存する基壇跡に8世紀中頃の瓦葺建造物が存在していたことが認められた。その他、土師器の高坏や須恵器の長頸壺の頸部片といった、祭祀儀礼に使用されたとみられる遺物が出土している。このような様々な発見によって、黄金山神社が奈良時代までさかのぼることができる、由緒ある寺社であることが考古学的に裏付けられた。

これらの調査成果により、歴史的な重要性が認知され、1967(昭和42)年に国指定の史跡として登録された。

資料提供：涌谷町教育委員会



六葉重弁蓮華文軒丸瓦(写真上)・偏行唐草文軒平瓦(写真下)
(涌谷町教育委員会蔵) ※宮城県指定文化財



「天平」宝珠瓦片(涌谷町教育委員会蔵) ※宮城県指定文化財

1994(平成6)年にオープンした天平ろまん館は、テーマ歴史館、砂金取り体験施設等からなり、町おこしの拠点として、文化と地域産業の振興を図ることを目的に様々な活動を実施している。

歴史館では、地域の歴史や人と黄金のつながり、発掘調査によって得られた出土品が展示されている。特に小田郡の産金については、関わりの深い東大寺大仏建立が大きく取り上げられ、全国各地から集められた銅や錫、水銀などとともに、国家の一大プロジェクトを支えたその重要性が語られている。展示品の中には、当時の国司であった渡来人系の百済王敬福くばらのくにきしきょうふくに関連する、百済王家の祈願寺出土の『百済金銅龍鳳蓬萊山香炉くばらこんどうりゅうほうほうらいざんこうろ』も展示されている。

体験施設では、昔ながらの碗がけ法を使った洗取で、砂金の採取体験ができる。この砂金は、産出量こそ少ないが純度が非常に高いことが分かっており、これには、黄金山神社が立地するののたけ窺岳丘陵を始めとした、北上山地の地質が関係している。北上山地は砂質凝灰岩が広く発達し、この中に挟まれている砂礫岩に多くの砂金が含まれている。この砂礫層が長い年月をかけて隆起し、河川の浸食を受けることで、金鉱床が発達し多くの産金地が生まれることとなった。平安時代以降の陸奥国のゴールドラッシュは、この地質的特質に起因するところがあったのである。

また、百済王敬福といった渡来人たちは、砂金について多くの知識を有しており、朝鮮半島の産金地に類似する地形や、モチ石と呼ばれる砂金を含んだ石英塊を見つけることによって、河川に眠っていた金鉱床を発見したのである。産金地に渡来人系の国司を配置するという状況は国としても産金地の発見は偶然ではなく、必然もしくは計画的なものであったのではないだろうか。



写真左：天平ろまん館：朱塗りの柱や回廊をイメージした軒先、瓦を葺いた屋根が天平文化を彷彿とさせ、外観にその荘厳さが漂っている。館内には学習施設だけでなく、レストラン「浪漫亭」が併設されており、涌谷町の郷土料理「おぼろ豆腐」などを堪能することができ、食を通して地域の文化も知ることができる。

写真右：百済金銅龍鳳蓬萊山香炉：百済王家の祈願寺から出土した香炉。現資料は韓国で国宝に指定されているが、日韓交流の証としてレプリカが寄贈された。涌谷町と敬福のつながりは、現在も国際交流という形で受け継がれ、敬福のルーツである韓国の全羅南道扶餘郡とは、児童の交換留学や友好親善協定を結ぶなど、古の繋がりは今もなお人々の心を動かし続けている。

見て学び、歴史を感じ、実際に体験する。天平ろまん館は、五感を通して金をより深く理解することができ、日本人にとって金が非常に身近な存在であることを気づかせてくれる。

また、黄金山産金遺跡に新しい動きがあった。令和元年度に文化庁の認定する「日本遺産」の『みちのくGOLD浪漫』を構成するストーリーとして登録され、地域や日本の文化を語るうえで欠かせない存在であることが認知されたのである。

引用・参考文献

佐々木敏雄 1954「黄金山神社志料」

福山宗志 2010「黄金山産金遺跡の軒平瓦」『北杜』辻秀人先生還暦記念論集刊行会

涌谷町 1965「涌谷町史 上」

涌谷町 1994「天平産金遺跡」

涌谷町教育委員会 1996「黄金山産金遺跡・黄金山南遺跡」

わくや万葉の里歴史館 2012「わくや万葉の里 天平ろまん館ガイドブック」

【コラム】二つの「こがねやま黄金山神社」

天平産金地といえば涌谷町の黄金山神社であるが、これが正式に事実として認定されたのは昭和の発掘調査以後であり、つい最近の出来事である。このような状況にあったのは、もう一つの黄金山神社である金華山の黄金山神社の影響が大きい。涌谷町の黄金山神社は前述したとおりである。

金華山の来歴については、弊社広報誌『温故知新』第3号を参照していただきたい。金華山の黄金山神社が文献上にみられるのは1869(明治2)年であり、大金寺が神仏分離令により弁財天を除き、金山毘古神と金山毘買神の二柱を祭神とし黄金山神社へと改称したとある。実は明治以前の記録については、度重なる大火において失われており、伝承に頼らざるを得ない状況がある。このため金華山の黄金山神社の出自については未だ不明な点が多い。

それにもかかわらず、江戸時代には、人々は信仰に現世利益を求め、勇壮な山稜に神秘性を感じとることで、金華山を産金地と連想する風潮が生じたと考えられる。その結果、事実と異なる論調が流布し、涌谷の黄金山神社は長きに渡り、歴史の影に身を落とすこととなる。

また、「金華山」産金地説を決定的にしたのは、江戸時代中期の仙台を代表する文化人であった儒学者 佐久間義和(洞巖)である。彼は伊達藩4代目伊達綱村の命で、1719(享保4)年に『奥羽観蹟聞老志』を記した。この中で、藤原光俊の歌に金華山を重ね、旧郡の合併の誤った解釈により、金華山を産金地として比定してしまったのである。



黄金山神社(涌谷町)



黄金山神社(石巻市・金華山)

真意はさておき、これに多くの文化人たちが追随した。各々自らの著書の中で、金を食べるナマコが周辺に住んでいるとか、参道や海岸に砂金がたくさん含まれているとか、島から帰るときはわらじを脱いでついた金を落とさなければならないとか、まるで金を生み出す島かのように、実態にそぐわない幻想や尾ひれ背ひれがついた噂話を読物として書き記し、人々の好奇心を大いに駆り立てたのである。

この一種の宣伝効果により、金華山は産金地として広く伝聞していったのである。同時に金華山講も拡大し、多くの人々に受け入れられていった。

近代においてもその根強い人気から、金華山の黄金山神社は信仰対象となっていたが、発掘調査によってその由緒は根底から覆ることとなった。しかしながら、歴代の関係者による草の根を分けた布教活動により信仰が途絶えることはなく、現在までその命脈が保たれている。

二つの黄金山神社の成り立ちは、天平産金が要因となっていることは揺るがないであろう。「黄金」が人々を魅了し、熱狂させた。

(小野寺 純也)

金華山講について 2

文化財調査室

田村 優衣

「波の花咲く 六里の浜辺

島に輝く 黄金の光り

サアサ景気は 金華山から

金銀財宝福の神〜♪」

弊社広報誌『温故知新』第3号に掲載した金華山音頭は、大正後半～昭和期にかけて活発に制作された「新民謡」のうちの一つと思われる。「新民謡」とはご当地の特徴、観光地などを題材として全国へのPRまたは、地方の人々が楽しむ目的で制作され、作曲・作詞者が特定できるものが殆どである。主に口承によって受け継がれ、作曲・作詞者が特定できない「民謡」とは異なっている。今回掲載した冒頭の金華山音頭は松村義人氏による作詞で、1932(昭和7)年にレコードが出ている。

それとは別に、1989(平成元)年にも金華山音頭のカセットテープが発売された。これは当時、宮城県で活躍した歌手 加藤八郎氏とその生徒達の金華山参拝に際して作られたもので、作詞は秋月信氏である。

現在、金華山講は衰退する傾向にある。金華山講とは、金華山を信仰する人々で構成された組織であり、講員の中から数人の代表者が金華山へ参拝して全員分のお札を貰う「代参講」のかたちをとる。金華山黄金山神社においては、かつての修行僧や御師などが各地で人々を勧誘し結成させた江戸時代からの代参講を「講中」としており、参拝する代参者は「講中帳」を持参するのが決まりとなっている。講中帳が無ければ「〇〇講」と名はついて「講中」ではないとされ、「講中」である証明が「講中帳」ということになる。そして代参者には名前の記入された神符が、参拝できなかった他の講員には名前の記入されない小さな神符が神社から交付され、代参者はそれを手に帰路につくのである。このような「講中」の縮小・消滅は、昭和の末頃から始まったという。原因は村中心の地域共同体の分解や流動化と考えられる。衰退をはじめた「講中」に代わり主流となったのが「団体参拝」で、これは昭和の後半に到来した観光ブームによるものであった。観光業者が募集するツアー形で参拝するのとは別に、会社や商店、関連企業群などが結成した「〇〇講」「〇〇会」といった団体が毎年、同時期に参拝するという形が多くなったのである。しかし、道路が整備されてマイカーが普及すると、個々の小グループでの参拝が容易になり、さらに団体のまとめ役が高齢化し勢いを失うなどして「団体参拝」も縮小・消滅していき、今に至っている。現在増加しているのは、観光を兼ねた「一般参拝」や「個人参拝」である。

以前の参拝は参籠が付きものであったが、現在は小さい講中であれば日帰り、福島県や岩手県にある大きな講中では参籠することもあるという。ここには参籠が付きものであった頃よりも交通が発達した事が表れており、先述したマイカー普及と合わせて交通と参拝との密接な関係が表れている。さらに郵便(通信)の発達も代参に



写真左 - 金華山碑：明治14年9月19日建立。須賀神社境内(仙台市泉区野村)。



写真右 - 金華山道碑：金華山道入口である七十七銀行穀町支店前の交差点に立つ石碑。

大きな影響を与えたようで、講中帳を郵送して参拝とする例も、近頃あったという。これについては講員の高齢化や交通費の問題、人との接触を制限される新型コロナウイルス感染症流行の影響などといった移動に対する現実的な障害や、講員の講に対する意識の変化など、現代を象徴する様々な原因が推測される。このような代参人が不在である「モノのみの代参」というのは、何かしらの画期となる事例のように思える。講や集団での参拝の減少、個人参拝の増加という流れの中、残っている講の中にあられた、講中の証明である講中帳のみが神社に来て、帰っていくという参拝のかたちは「人」「場所」「モノ」の関係性の大きな変化を感じさせる。

次に、現在も団体で参拝を行っている七十七銀行の例を紹介する。七十七銀行では、年に3回の参拝(お祭参加)があるという。年始祈禱・辰巳祭(5月)・龍神祭(7月)で、年始祈禱に関しては、当地区担当役員・石巻支店長・鮎川支店長の3名他行員数名が参加する。辰巳祭と龍神祭に関しては、祭りのお手伝いという意味での参加で、鮎川支店の若手が参加することになっている。加えて七十七銀行では、金華山黄金山神社のほか、塩釜神社、竹駒神社、大崎八幡宮などの祭への参加も行っており、行是にある「地域社会への貢献」という取り組みの一環として行われている。これは七十七銀行の設立に深く関わった渋沢栄一との繋がりを残すものであるという。

金華山講の今までをなぞるうち、「金華山講」にも種類があり、江戸時代に修行僧や御師によって結成された「講中」と、「団体参拝」としての「講」がある事がわかった。そして、そのいずれも縮小・消滅が進んでいる。「講中」に関しては、代参人のいない講中帳のみの代参、つまり「人が場所に行かない」という参拝の事例が出たことが、「大きな変化の前兆」にも思える。一方で、七十七銀行で行っている年始祈禱のほか2回の祭に参加するという取り組みは、講ではないながらも「人が場所に行く」必要があり、この先も継続される可能性がある。これは安定した基盤を持つ「変わらない」ものの一つであろう。

引用・参考文献

- 株式会社七十七銀行 総合企画部 企画課「2020年版ミニディスクロージャー誌(中間版)」七十七銀行サイト(最終閲覧日:2021年3月9日)
<https://www.77bank.co.jp/pdf/77bank/2020minihmid.pdf>
- 夏目魯人「戦前流行歌 頭文字き」懐かしの流行歌 昭和前期懐メロ(最終閲覧日:2021年3月9日) http://natsumerojin.web.fc2.com/_kayou022.htm
- 牡鹿町 2005「牡鹿町誌」中巻
- 増田周子 2008「日本新民謡運動の隆盛と植民地台湾との文化交渉 一西条八十作「台湾音頭」をめぐる騒動を例として」『東アジア文化交渉研究創刊号』関西大学文化交渉学教育研究拠点

謎の「天平」宝珠瓦

文化財調査室

佐々木 竜郎



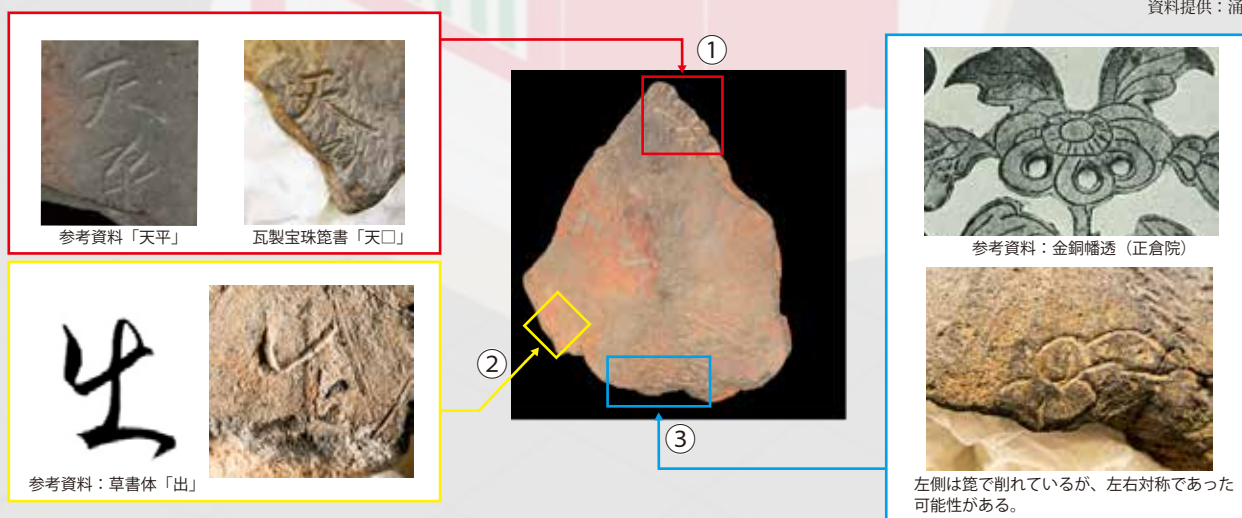
「天平」宝珠瓦片：先端が尖り六角錐形を呈する。右はその破片をCGで復元した宝珠に合成したもの（内藤政恒氏の復元図を参考に作成）。

1944(昭和19)年7月、大雨で出水のあった黄金山神社の下を流れる小川の中から、1点の遺物が発見された。それは、胎土や成型から瓦製であることは明らかであったが、それまでに発見された丸瓦や平瓦類とは異なる一風変わった特徴をもつものであった。そしてまた、「天平」の窠書の存在から、今では黄金山産金遺跡の最も有名な遺物でもある。

その形状は、外面の一部が尖り、これを頂点に6本の稜線が放射状に走って六角錐を呈する。製作技法は、外面に縄タキの痕跡が見られ、ケズリやナデによって平瓦等と同じように仕上げられているのに対し、内面は成型時の輪積みの痕跡を残したままの状態、どうやら人の目に触れないからか最低限の調整にとどめているようにも見える。黄金山神社では、古くより瓦が拾えることから瓦葺きの建物の存在が知られていたが、内藤政恒氏は、この遺物を宝形造か円堂の屋上頂部に置かれた宝珠の残片と推定し、更に軒丸瓦の蓮華文が六弁であることと、宝珠の六角錐の形状を関連付けて六角円堂の存在を想定した。しかし、今のところ奈良時代の宝珠瓦は知られておらず、また、発掘調査が行われたが、六角堂が想定されるような礎石の配置などは確認されていないため、未だ謎を残しているといえよう。

また、この宝珠瓦には3面に窠書が認められるが、その一つは「天平」と想定され、年号が銘記された瓦としても著名である。詳しくみると、①は「天」の下が欠けて判読できないが、1889(明治22)年に発見された丸瓦の「天平」の窠書と筆跡が類似しており「天平」であったと推測される。産金を記念して仏堂が建てられた際のものだとすれば、天平21年から、「天平感宝」、「天平勝宝」、「天平神護3年」までの18年間のいずれかとなる。他の2箇所の窠書は、これまであまり触れられてこなかった部分であるが、まず②については「出」の字に酷似している(※)。『続日本紀』天平感宝元年四月二十二日条に、「出金山神主日下部深淵」の記事があり、窠書きされた文字は『出金山』であった可能性が指摘できる。また③は、字ではなく絵のようなものが書かれていることが想定されるが、③写真上のような宝相華文であった可能性がある。まさに天平に出た金に対して華を添えたのかもしれない。(※)「出」の解説については、書家 佐々木祐一氏のご教示を得た。

引用・参考文献：宮城県涌谷町 1994 史跡 黄金山産金遺跡 関係資料集
資料提供：涌谷町教育委員会



それは、大地を読むことから始まる。



Construction Consultant

株式会社 三協技術

E-mail : sankyo @ sankyocc.jp

一業務内容一

- ・建設コンサルタント業
- ・測量業
- ・地質調査業
- ・補償コンサルタント業
- ・文化財調査
- ・不動産業
- ・数値解析
- ・環境調査
- ・下水道調査
- ・一級建築士事務所
- ・特定建設業
- ・宅地建物取引業
- ・労働者派遣事業

本社 / 〒980-0803

宮城県仙台市青葉区国分町3丁目8番14号

TEL : 022-224-5503 FAX : 022-224-5509

調査部 / 〒980-0011

宮城県仙台市青葉区上杉1丁目7番7号2階

TEL : 022-796-5816 FAX : 022-796-5826

文化財調査室 / 〒982-0003

宮城県仙台市太白区郡山5丁目19番15号

TEL : 022-748-0225 FAX : 022-748-0226

大崎支店 TEL : 0229-91-8465 FAX : 0229-91-8466

東京支店 TEL : 03-6276-1624 FAX : 03-6276-1625

盛岡支店 TEL : 019-681-7483 FAX : 019-681-7484

福島支店 TEL : 024-973-8681 FAX : 024-973-8682

山形支店 TEL : 023-665-5735 FAX : 023-665-5736

北関東支店 TEL : 028-611-3432 FAX : 028-611-3454

青森営業所 TEL : 017-718-0911 FAX : 017-718-0912

秋田営業所 TEL : 018-883-3910 FAX : 018-883-3911

石巻営業所 TEL : 0225-21-5563 FAX : 0225-21-5565

気仙沼営業所 TEL : 0226-25-9098 FAX : 0226-25-9108

福島営業所 TEL : 024-572-7281 FAX : 024-572-7283

栗原営業所 TEL : 0228-24-7921 FAX : 0228-24-7922